



ランチェスター協会 レポート 第16号

第236回 戦略研究会 報告

2019年1月22日 ランチェスターホール(協会常設会場)

発行
特定非営利活動法人
ランチェスター協会
編集責任者
特定非営利活動法人
ランチェスター協会
インストラクター委員会

～講演～

平成から新たな時代への提言『日本の歩んだ道 これから歩む道』

～成就すべきテーマと取り組む課題～

講師：矢野 弾 様 (月刊カレント 代表取締役・矢野経済研究所特別顧問)

2019年初めをかざる研究会は、当会の設立を主導されて副理事長を務められ、現在は特別顧問の矢野弾先生(月刊カレント 代表取締役)にご登壇いただきました。時代をとらえ、我々はどうあるべきか、年の初め、元号の変わり目、時代の変わり目に大きな示唆を与えていただきました。

[データをとらえ、自ら仮説をたてる、物語をつくる]



かつて経済白書というのがありました。経済企画庁の音頭のもと、各省庁から2名の精鋭が集められ、データのなかから果たして日本がどういう状況にあるのか、論争しながら意見をたたかわせながら作り込んでいきました。

「もはや戦後ではない」「これからは経済の時代である」という言葉もこうして生まれたのでした。2002年以降、合理化政策で内閣、総理府の国内調査課に集約されてからは、経済財政白書はデータの羅列に過ぎなくなり、誰も目を通さなくなってしまいました。

まずは、データという事実をとらえる、そして仮説をたてて自ら答えをいれてみる、その時初めて、調査、経営が生きてくるものです。自分の中に芽生える探査能力、好奇心、問題意識なくして、それはなしえませんが。

もしわからなければ、原理原則に戻る、そして歴史と人間に学び、時代をとらえ、点・線・面・球と視座を広げていくことが大事です。

さらにそれを世界に向けてどうなるか？トランプ大統領がアメリカファーストを唱えましたが、一方国連は世界194カ国も加盟している。日本は国連中心の社会でどうあるべきかを考えるときでしょう。

今、中国はアフリカに力を入れています。アフリカ53カ国全部を集めて会議を開催しています。しかし、そうした地球規模での視座の行動は65年前にすでに始まっていました。中華人民共和国が中華民国(台湾)を押しつける形で国連に加盟する際、アフリカ53カ国を味方にしました。お金を貸し、ビジネスで関わり、マスコミ

は大きくは報じませんが折に触れて53カ国会議を開いて地道にネットワークを構築してきたのです。

21世紀は心と感性と存在感の時代、データの分析、仮説づくり、そこには物語がなければいけません。

北里病院の建て直しに際して日本画家の田村能里子さんが、壁画を任せられた294本のつくしんぼを描きました。それは病院の総ベッド数でした。つくしんぼは入院退院する患者さん一人ひとりのものであるわけです。データをもとにしたひとつの確かな物語がありました。

ランチェスター戦略も、実践するにあたって、どう物語に組み込むか、計算式も大事ですが、その人のハートをつかむ、福永さんの講義をうかがった際、そこには間違いなく物語が含まれているのを確認しました。

[ヒューマン資本主義の時代]

企業競争力を考えた時、外部競争力条件、内部競争力条件、とありますが、ランチェスター戦略は外部競争力条件に該当します。経営、市場、マーケティングとして、どういうひとつのテーマをもつか、挙げられたなか、何をとりだすか。経営とはなにか、自らが好奇心の目をもち、社会観、時代観、大局観、心理観、自分自身の思考と問題点を醸成し、決断行動していくことが求められるでしょう。

20世紀以来続いていた金融資本主義はリーマン・ショックでもはや終焉しました。以降まだモデルを見いだしていません。21世紀という心と感性と存在感の時代、日本だけでなく、アジア、世界の平和を考えねばなりません。日本こそが、次の「ヒューマン資本主義」の時代を担うべきではないでしょうか。

お客様、仕入れ先、下請け、銀行、社員、管理職、株主、関係者すべての幸せを考えることを、経営の要素に加えることで、ヒューマン資本主義という新資本主義を提唱する時期がきました。我々ひとりひとりが提案する、世間に提示する、ランチェスター協会として提示することがあってもよいのでは。どういう選択肢があるのか考えてみてはいかがでしょうか。

報告者：鈴木俊介(協会理事・認定インストラクター)